

平成 27 年度 第一回北海道立総合博物館協議会  
アイヌ民族文化研究センター専門部会議事概要

1. 開催日時 平成 27 年 11 月 10 日（火） 13:30～15:05
2. 開催場所 北海道庁本庁舎 7 階 共用 B 会議室
3. 出席者
  - (1) 委員 加藤 忠委員（部会長）  
児島 恭子委員  
酒井 奈々子委員  
澤田 一憲委員  
関根 真紀委員  
※欠席 大島稔委員
  - (2) 事務局 堀籠 正（北海道環境生活部 くらし安全局文化・スポーツ課主幹）  
遠藤 健司（北海道環境生活部 くらし安全局文化・スポーツ課主査）  
廣畑 真記子（北海道環境生活部 アイヌ政策推進室主幹）  
石森 秀三（北海道博物館 館長）  
中村 亘（北海道博物館 アイヌ民族文化担当副館長）  
北 敏文（北海道博物館 総務部長）  
小川 正人（北海道博物館 アイヌ民族文化研究センター長）  
右代 啓視（北海道博物館 総務部企画グループ学芸主幹）  
甲地 利恵（北海道博物館 学芸部社会貢献グループ研究主査）  
出利葉 浩司（北海道博物館 学芸部道民サービスグループ学芸員）  
会田 理人（北海道博物館 総務部企画グループ学芸主査）  
田村 雅史（北海道博物館 総務部企画グループ研究職員）

4. 議題

- (1) 北海道立総合博物館協議会の説明
- (2) アイヌ民族文化研究センターの事業計画
- (3) 今後のスケジュール（案）
- (4) 意見交換・情報交換

5. 議事内容

■議題（1）北海道立総合博物館協議会の説明

右代学芸主幹より資料 2 の「平成 27 年度 第 1 回北海道立総合博物館協議会議事概要」に沿って、適宜資料 1-1、1-2、3、4 に言及しながら 8 月の協議会の報告を行った。また評価作業部会の進捗状況についての報告を行った。

### 《質疑応答 1》

委員：資料 4 は専門部会での認めるということか？設置することというのはだれがでしょうか？

事務局：付託事項による作業をお願いすることです。親会が設置するということですか。

委員：作業部会ではどのようなことをやるのかについてご説明頂きたい。文言の中にある調査審議とはどういうことでしょうか？どんなことを調査審議するのでしょうか？

事務局：調査審議いただく内容は資料 4 の 2 にある付託事項です。私共が設置する中期計画や年度計画などについて、内部点検を通して意見を言って頂いたり、具体的に何かを調査して頂くことにはならないと思いますが、点検する上で必要なことがあれば事務局に要望を出してもらうことになるかと思えます。その際にはアイヌ民族文化研究センター及びアイヌ民族に関する事業が北海道博物館の中できちんと出来ているのかなどを評価の中で点検して頂き、ご意見を言って頂くということですか。

### 《質疑応答 2》

委員：運営方針についても何か意見を申上げるということでしょうか？

事務局：もし何かあればご意見を頂きたいということですか。

## ■議題（2）アイヌ民族文化研究センターの事業計画

小川センター長より、研究センターの経緯、補訂の趣旨、北海道博物館における研究センターの組織上の位置付け等を説明した後、田村研究職員より資料 5 を用いて、研究センターの平成 26 年度事業報告を行った。続いて、小川センター長より資料 6-1 の「H26～31 アイヌ民族文化研究センター事業推進方針 補訂版（案）」について、説明を行い、質疑応答を行った後、補訂案が了承された。

### 《質疑応答 3》

委員：資料 6-1 にある「毎年度点検し」とは、資料 4 にある「調査審議」にあたるのでしょうか？

事務局：はい。私共も自己点検を行いますが、専門部会でも毎年度点検して頂くこととなります。

### 《意見 1》

委員：全体的に何を実施していくのかは理解できたが、「情報発信」、「学術的な信頼性の高い情報のニーズ」、「貴重な資料」など、いろいろな文言が重複していたり、曖昧になっている点が多々あるので、そのあたりの文言を整理していただきたい。

事務局：わかりました。整理いたします。

### 《意見 2》

委員 A：私の中では研究センターはもともとあまり存在感を感じていなかった。それで北海

道博物館の中に入って、益々存在感がなくなってしまうのではないかと感じている。もっと研究センターの知名度を上げたり、存在感を上げるような取り組みをして頂きたい。職員がもっと表舞台にでられるような組織になって欲しいと思っている。例えば、子どもたちが研究センターは何をやっているんだろうと、興味を持つような、身近な研究センターになって欲しいと思う。

事務局：ご指摘はその通りだと思います。昨年度と今年度は館のオープンということに集中したところがあるので、来年度以降の事業については、少し目立つような事業をやっていこうと考えています。

委員 B：そういう意見の中で、何が見出せるかですから。

#### 《質疑応答 4》

委員 A：「社会的にはアイヌ文化の関心が高まっている」というのはどういう根拠ですか？

事務局：例えば、総体的な目で見ているところと言えば、出版物の発行数だとか、インターネット上やその他における情報の量ということです。今高いという話ではなく、20年前に比べると、少し上がってきているという話です。

委員 B：十年前に比べると高いです。例えば、イランカラブテだって、100社以上の会社が参加してくれています。ずっと前はそういうことは考えられなかった。それは広く評価していけばいいのではないかと思います。

委員 A：北海道ですか？

委員 B：もちろん全国のことだけれども、全国はまだとてもではない、これからだと思う。

### ■議題（3）今後のスケジュール（案）

右代学芸主幹より、資料7を用いて、今後のスケジュールについて説明を行い、了承された。

### ■議題（4）意見交換・情報交換

#### 《情報交換 1》

委員：祭司をやって思うことだが、ストウイナウの羽の枚数、地域差など、それをどうして作るのかなどの情報があれば、今後の研究・調査などの取り組みの中で情報を提供をして欲しい。

事務局：先ほどいった「きちっと情報の提供をできるようにします」というのは、今お話があったことなどについての、きちんとしたデータベースを提供できるようにする、ということです。例えば、道の教育委員会の報告書などをきちんとデータベースにして、検索して関係する情報が出てくるようなシステムを作れば、大分違って来るのではないかと考えています。

#### 《意見 3》

委員：これからの子ども達が将来へつなげていくので、子ども向けの行事を重視して、子ど

もが興味を持つような仕掛けを考えて、もっともっとやって頂きたい。例えば、夏休みに向けて子供が自由研究に出せるようなものを、開発しながらやって欲しいと思います。

#### 《意見4》

委員：松前町の副読本がきちっとやっていて、北海道の負の歴史もありながら、北海道の歴史を隠すことなく作っていると聞いている。最近の事例のように、北海道にいても、いろいろ誤解されることはあつたりするので、北海道の置かれてきた歴史的な位置付けについての取組みは、松浦武四郎なども含めて、一度にやれとは言わないけれども、これからは共にやっていくことだと考えているので、よろしくお願ひしたいと思っています。

事務局：北海道博物館の2018年の特別展は「松浦武四郎展」を計画しております。今お話にあったような、アイヌ民族との絡みをきちんと踏み込んでやっていきたいと思っています。

#### 《意見交換2》

委員A：先ほど説明にあった巡回展などについてですが、道北地域については、自分の経験上アイヌ文化に関する普及率が低いので、そうした地域で地名などの講座やイベントをやって欲しいなと思っています。

事務局：子ども達のためにとというのは、非常に大切だと思っております。また掛け替えのない文化を未来へ伝承するというのも、本当に大切なことだと考えています。北海道に暮らす子どもたちすべてが、学習し、体験し、楽しんでもらう中で、よりアイヌ文化に関するきちんとした認識をもってもらうことは、大切だと思いますので、貴重な意見をありがとうございます。

委員B：偏った考えではなく、共に歩むということで、やはり共生の社会をどのようにしていくかだと思います。酒井委員が帯広で取り組んでいるように、小さい子どもから大人までが混じり、その中に若い人が多くいるような取り組みの中から、ものが生まれてくるのだと思います。いろいろな意味で歴史的な背景を、まずは道民で良いと思うので、少しずつでいいから、何らかの形で取り入れて頂けたら、ありがたいと思います。

委員A：子どもたちの目線で、歴史を知ってしまうと、すごく暗い気持ちでアイヌ文化に入ってきてしまうことがある。アイヌ民族が虐げられてきた歴史を学ぶと、かえって「アイヌはいじめてもいいんだ」と思ってしまう子どもが出てくる。だから、まずは「楽しく、遊んで、学ん」でアイヌ文化を知った上で、高校なり大学などでアイヌの歴史を知る方が良いと思っています。だから、第2テーマの「5世代の物語」のようなものはいいと思うので、そのように博物館で楽しく学んで、楽しんでアイヌ文化の中に入れるような展示をお願いしたいなと思っています。